お市の方

戦国の凰

おおとり

鈴木輝一郎

Oichino Kata
Sengoku no Otori
Suzuki Kiichiro

講談

講談社文庫

常州大学図書館
藏書章

市の古戦国の凰（おおとり）

鈴木輝一郎

講談社

|著者| 鈴木輝一郎　1960年岐阜県生まれ。日本大学経済学部卒業。'91年『情断！』でデビュー。'94年「めんどうみてあげるね」で第47回日本推理作家協会賞を受賞。歴史小説の著作が多く、『美男忠臣蔵』『片桐且元』『戦国の鬼　森武蔵』『浅井長政正伝』『本願寺顕如』など。小説指南書として『何がなんでも作家になりたい！』『時代小説が書きたい！』も話題に。戦国小説の近著に『信長と信忠』がある。

お市の方 戦国の凰
鈴木輝一郎
© Kiichiro Suzuki 2011

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2011年7月15日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———信毎書籍印刷株式会社
製本———株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277010-1

目次

序章　7
第一章　娘として　14
第二章　妻として　90
第三章　母として　169
第四章　女として　212
解説　柴田よしき　326

講談社文庫

お市の方 戦国の凰（おおとり）

鈴木輝一郎

講談社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

序章　7
第一章　娘として　14
第二章　妻として　90
第三章　母として　169
第四章　女として　212
解説　柴田よしき　326

お市の方　戦国の凰（おおとり）

序章

時は、おもしろい。

市は小江の髪に櫛をとおしながら、おもった。

とまっているようでありながら、まばたきの間にすぎてゆくようでもある。

この三年ほど前から軒先に燕が住まうようになった。年に二度、子燕が巣立つ。今年最初の子燕は、そろそろ巣がきゅうくつになってきている。紫陽花は盛りをすぎた。

きのう、小江は娘になった。

いぜんから月のものについては話してある。小江はあわてず、はな紙を小指の先の大きさにまるめ、菱のなかにおさめた。ただ、力加減は言葉ではわからない。昨日から小江を厠のそばの縁にすわらせ、はやめはやめに立たせて、衣服がよごれぬように気遣った。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

夏である。庭先に水を打ってはいるものの、汗がにじんだ。
「かあさま、お手がとまっておりまする」
うしろから初に声をかけられ、市は我にかえった。
「そうですね」
初には団扇を持たせ、あおがせている。
「ふと、小谷の城を思うておりました」
乳飲み子だった小江を抱き、茶々に初の手を引かせ、小谷城を出たのが、昨日のような気分であった。それが、いつの間にか小谷で過ごした時間より、北伊勢、安濃津の城の一角に庵をあてがわれて住んだ時間のほうがながくなっている。
「小谷の城は、冬は寒うて参りましたが、夏は涼しいものでした」
と、つい口に出してしまい、すこし悔やんだ。
「安濃津の城も、よいところです。……茶々はどうしております」
「奥で手習いを」
「そう、ですか」
遠い昔、市が清洲の城にいたころ、いろいろな男たちが出入りした。信長は面白がって市の前に武将を連れ出しもし、市もよく笑ったものだった。

それが、今では誰も立寄らない。茶々も、あまり笑わない娘になった。母親の目からみても肌は雪のように白く、髪は黒く太くゆたかで、灯明の下でもよく輝いた。うつくしい娘であった。けれども、おもだちにときどき翳をみせる。市はそれがいちばん悲しかった。

そのとき。

「小谷の方」

煮炊きの世話を手伝わせている老婆が、市に声をかけてきた。

「殿様からのご使者が参っております」

安濃津城主は市の四歳年上の兄、織田信包である。

「なんと仰せですか」

「ほどなく馬をさしまわしますゆえ、お子たちとともに、出立のお支度をなさいますように、と」

「行く先はどちらですか」

「清洲城との由にございます」

そう聞いたとき、ふと、市の脳裏を過去がよぎった。おぼえている限りいちばんふるい記憶で、にもかかわらず今でもあざやかに目にうかぶ。

あれは五歳だったか六歳だったか。清洲城だったのはたしかである。具足に身を固めた武者たちが居並ぶなか、市は女に手を引かれて表座敷に連れ出された。

「権六」

信長は桃をほおばりながら声をかけると、髭面の荒武者がにじり出た。

「俺の妹だ。抱きあげよ」

権六と呼ばれた荒武者の、当惑した顔がおかしかった。くすくすと笑いながら市は権六のもとに駆け寄った。

権六はまず、市に深く頭をさげた。

「拙者、織田勘十郎信行様が傅役にて上総介信長様が寄騎、柴田権六勝家と申し候」

そして、両腕をひろげた。

「ご無礼つかまつる。参られませよ」

なんと律義な、と、市は子供心にもおかしく、勝家の腕のなかにとびこんだ。籠手でかためてあるはずなのに腕がやわらかい。顔をあげると、そこに勝家の密集した髭があった。

織田の家系は体毛がうすい。こんなに濃い髭を間近でみるのははじめてだった。市は手を伸ばし、頬のあたりの髭をつかんで、力いっぱい引っ張った。

「痛うござりまする」

勝家はそう言いつつ、市の目をみて微笑んだ。その、勝家の目のなかに、なにかがあった。市は、自分の胸が高鳴る音を、これもまた生まれてはじめて聞いた。

「権六。室と死別していかほどになる」

「十七で娶って三年でみまかりましたゆえ、十年にはなろうかと」

なぜ後妻をとらぬ、とは信長は言わなかった。

「市を、どうおもう」

勝家はふたたび市の目をみ、ふたたびあたたかく微笑んだ。

「世に二人とおらぬ麗人に、おなりあそばそうかと存じ申し候」

「やる」

「は？」

「此度の清洲攻めの一番槍の褒美だ。嫁にせよ」

もういちど、市の胸がたかく鳴った。

「お言葉ながら、娘にせよとならばともかく、まだおさなごに候はば」

信長はかじりかけの桃を差し出した。
「では、これをとれ。市と食いかけの桃の、どちらかを選べ」
勝家は、市の耳元でささやいた。
「おゆるし候え」
そっと市をおろした。
「桃を頂戴つかまつり候」

以来、三十余年になる。
「行き先は、清洲城にまちがいありませんね」
「使者は、そう申しております」
「どなたが使者になっておられるのですか」
「分部四郎次郎様でございます」
「それは――」
織田信包の家老の筆頭である。市も面識があった。
「わかりました」
市は内心、首をかしげながらもこたえた。何の用があるのだろう。

清洲城主は、信長の長男、信忠（のぶただ）であるが、今は城番が置かれるのみで、城主がいない。

信長と信忠は、つい先日、京都本能寺（ほんのうじ）と二条城（にじょうじょう）で、明智光秀（あけちみつひで）に襲われ、横死したばかりのはずであるのだが。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com